

新学習指導要領の下での授業実践

— 伝統的な言語文化の学習における小・中・高の連関について (2) —

増田 知子 吉田 裕久 山元 隆春 三藤 恭弘
羽島 彩加 朝倉 孝之 岡本 恵子 新治 功
西原 利典 松本小百合 三根 直美

1. はじめに

本研究は、2010（平成22）年度に改訂された新学習指導要領のもとで国語科授業をどのように実施すべきか、とりわけ新設の「伝統的な言語文化」の授業について小学校・中学校・高等学校の連関・系統をどのように考えればよいのか、それを実際の授業を通して実践的に考察・提案しようとするものである。小学校はすでに平成23年度から、そして中学校は本年度（平成24年度）から、それぞれ新教育課程が実施されている。高等学校は、来年度（平成25年度）、第1学年から年次進行で実施されることになっている。その意味では、本研究は、こうした制度の改訂と同時進行で行うものである。本稿は、昨年度の研究「伝統的な言語文化の学習における小・中・高の連関について（1）」に続く第2年次の研究報告である。

前稿（1）において、古典授業に関する学習者へのアンケート調査、及び国語教科書における古典教材の調査から、次のような特徴・課題があることを提示した。

○学習者へのアンケート調査から

小学校では音読など「言語活動学習」の印象が強く、中学校では昔のことを知りうる「理解学習」に意味を見だし、高等学校では「古典世界に生きる人間や書き手に興味を持つ本質的理解」という、古典学習受容に対する発達段階を見いだすことができる。

○国語教科書所収の古典教材から

『枕草子』の「春はあけぼの」、『徒然草』の「つれづれなるままに」、『平家物語』の「祇園精舎」、これらは、いずれも小・中・高校の国語教科書に繰り返し採録されており、多くの学習者が3回も目にするようになる。

しかし、扱いは、それぞれである。小学校では音読を中心にして、そのリズムを感じたり、書くことを取り入れたりして親しむことに努めている。ただし、中学校で従来やってきたことをほぼそのまま小学校で取り入れている場合もある。特に「春はあけぼの」は、小学校で中学校と同じような実践（自分たちの感じている季節で代表的なものを取り上げよう）をするようになったので、中学校では別の箇所を教材として取り上げる傾向もあるようだ。高校では、「春はあけぼの」以外の章段が取り上げられている教科書が多い。

こうして、従来は中学校で目指されていた「古典に親しむ」というねらいが小学校に前倒しされたことから、中・高間で考えれば良かった関連・系統が、小・中・高間で考えねばならないことになった。とりわけ入門期から中間期に移行することになった中学校が、目標・内容・方法そのいずれもがとらえ直しを迫られている。

そこで、こうした課題を解決するために、今回は、小・中・高校の関連・系統という視点から、小・中・高校いずれの教科書にも掲載されている「枕草子」を取り上げてその授業を事例に考えてみることにした（高校では参考程度に載っている教科書が多いので、実際に授業する必要はないと判断し、これを割愛した）。小学校は5年生、中学校は3年生で授業することにした。

その際、小・中それぞれ、次の観点で授業を展開する。

○小学校5年——古典の文章の中から既知の言葉を手がかりに読み取り、筆者のものの見方・感じ方・考え方と自分のものの見方・感じ方・考え方と比べながら読む。

○中学校3年——小学校を受けて、古典に現れたもの

Tomoko Masuda, Hirohisa Yosida, Takaharu Yamamoto, Yoshihiro Mito, Ayaka Hajima, Takayuki Asakura, Keiko Okamoto, Isao Sinji, Katsunori Nishihara, Sayuri Matsumoto and Naomi Mine: Classes based on the new course of study - On coordination of the curriculum among elementary, junior and senior high schools in learning traditional linguistic culture (2) -

の見方・感じ方・考え方に触れて自分なりの感想や意見をもち、さらに古典が自分たちと関係があり意味があるという現代的価値に気づく。

こうした試みは、「伝統的な言語文化」の学習において、小学校・中学校（・高等学校）の段階性（共通性と異質性、連続性と非連続性など）を明らかにすることになると思われる。（吉田 裕久）

2. 小学校における授業実践

「枕草子」（光村図書5年）

1 研究テーマとの関連 — 本実践の仮説 —

小学校における伝統的な言語文化の学習をどのように行っていけばよいか考察したい。

小学校では、古典の文章と出会い、言葉の響きやリズムを味わうとともに、文章の内容の大体を知ることができるような学習にしたい。小学校の児童でも、知っている言葉を手がかりに筆者が描いていることを感じながら読むことができると考えている。古人の描いた世界観と自分の感じ方を比べながら読むことを構想していきたい。そこで、次のような仮説を設定した。

古典の文章の中の知っている言葉を手がかりに、筆者が表現したことについて自分が考えたことを伝え合う活動は、筆者のものの見方・感じ方・考え方と自分のものの見方・感じ方・考え方を比べながら読むことにつながるだろう。

2 教材の分析および授業の計画

教材文「枕草子」は、随筆で、その第1段は四季について書かれ、児童が興味をもちやすい題材である。四季の説明だけでなく、四季に対する清少納言の独特なものの見方・感じ方・考え方が表現されており、児童は、現代の生活や自分の感じ方と比べながら読むことができると考えられる。

今回の研究では、「枕草子」の第1段で仮説の検証をする。具体的には、「枕草子」の第一段の夏の部分で知っている言葉を手がかりに大体の内容を読み取り、清少納言の夏に対する感じ方について話し合う学習活動を行う。学習のまとめで、話し合ったことを生かしながら、筆者のものの見方・感じ方・考え方と自分のものの見方・感じ方・考え方を比べて読むことができるかを検証したい。

3 授業の実際

(1) 指導計画（全5時間）

第1次『今も昔も』の物語を読む。

- ①「竹取物語」の冒頭に出てくる登場人物の様子を考えながら読む。
- ②「平家物語」の冒頭の「春の夜」や「風の前の塵」は、どんなことを表しているのか考えながら読む。

第2次『今も昔も』の随筆を読む。

- ①「枕草子」に出てくる夏について考えながら読む。
(本時4/5)

- ②「枕草子」を読んで清少納言の四季に対する考え方と自分の考え方を比べる。

(2) 本時の目標

「枕草子」の第一段の「夏は」の文章を読み、筆者のものの見方・感じ方・考え方と自分のものの見方・感じ方・考え方を比べることができる。

(3) 授業の展開

「枕草子」の「夏は」の文章から知っている言葉をもとに「夏は夜」と表現している筆者のものの見方・感じ方・考え方について読む学習を行った。まずは、文章中の知っている言葉を挙げさせた。児童は、「蛍」、「月」、「雨」、「闇」、「光」、「をかし」、「ほのか」、「行く」、「一つ」、「二つ」、「降る」、「飛ぶ」、「多く」という言葉について知っていると言った。それらの言葉から、「夏は夜」という言葉の意味を考えさせた。すると、児童の中から、「夏は夜の時間が一番おもしろいという意味だと思う。」という発言が出てきた。そして、「この話は、夜の話ということで蛍はそういうこと。」「月も。」「すてきだっていうこと。」という発言が続き、筆者が「夏は夜」と表現した根拠を挙げて考えていた。

次に、自分の夏のイメージを挙げた。児童から出てきた夏を連想させる言葉は、次のように分類できる。
(暑さに関するもの) クーラー、熱中症、うちわ、風鈴
(夏休みに関するもの) サマースクール、夏期講習、水泳、プール、ゲーム

(夏の行事に関するもの) 花火、海、お盆、旅行
(夏の衣服に関するもの) ゆかた、麦わら帽子

その後、清少納言と自分たちの夏を表現するのに使う言葉のちがいを挙げ、清少納言が「夏は夜がすてきだ」と表現したのはどうしてかについて話し合い活動を行った。すると、「筆者は、静かなところや涼しいところがいいんだと思う。夜は涼しいし、ほたるは静かなところにいるから。」「筆者は、春夏秋冬で書いて、一つ一つすてきな時間が違って、他の季節は、夜は悲しいなと思うけど、夏は明るい気がするからそう思ったと思う。」「みんなの夏のイメージは、昔と違うから、たとえば、ゆかたは、年中着ているから珍しくない。」「現代は、ゆかたとか珍しいけど、昔は日常的に毎日着ているもので、今でいうと半袖とは書かないからゆかたとかは書いていない。」「昔の人だから今みたいに夏期講習やクーラーとかの人工的なものじゃなくて自然の海や夏を感じられる蛍や雨で、筆者が感じたことを書きたくなった。」「清少納言は、貴族に仕えていた女性だと思うから、そんなに、祭りとかに行

けないから、昔は蛍とかたくさんいただろうから、ただただ日常的に家の中や窓際、縁側で見えるもので考えたから素朴な感じがする。」「筆者は自然の限られたもので夏を楽しんでいるけど、ぼくたちは、何か贅沢な感じがする。」「筆者は、自然のものがいいと書いていて、今は、人工的なものを楽しんでいる。」と、筆者の表現した夏の風情を表す言葉や様子と自分たちから出てきた夏を感じる言葉を比べた話し合いが展開していった。

学習の終末に「筆者は、夏は夜と表現していますが、あなたは、夏のことを表現するのに夜を選びますか。」という発問をした。すると、「夜とか暗くて怖いから、朝を選びたい。すっきりしている。」「朝がいい。起きた時にせみがないいたら夏だと思うから。」「プールとか夜は開いていないし、友だちも夜は遊べないから、朝や昼がいい。」「夜は、月の光とかあって、雨がふるといいと書いてあったから夜がいい。」「昼がいい。夜はだれも遊んでくれなくてにぎやかにできない。大声を出して遊べないから、昼がいい。」と夏の昼に元気に遊ぶことがいいと感じている発言が多く見られた。

この授業では、児童が話し合いの中で自分のものの見方・感じ方・考え方と比べながら読んでいたことから、言葉の響きや読み方だけでなく、千年前に書かれた文章を読んで、筆者のものの見方・感じ方・考え方に触れ、筆者の表現したことを読み味わうことができたと考えられる。

4 考察

授業の振り返りで、筆者と自分を比べて考えたことを記述した。児童は、「筆者は、夜、素朴な夏の夜に楽しみを感じているけど、自分たちは、人工的なもので夏を過ごしている。」「ぼくが感じたことは、夏は楽しくて、にぎやかだけど、枕草子の筆者清少納言は、夏は、静かで蛍が多く飛んでいる夜が好きだと思う。」「筆者は、夏の夜しか見られない、感じられない『自然』を素朴に静かに楽しんでいるのに対して、自分は夏の昼でも朝でも見られて感じられる人工の物を楽しんでいると思った。昔は、自然（虫など）に触れることが現代よりも多いのかもしれないと感じた。」「私は、筆者と同じで、夜、蛍を見たらきれいだなと思うし、静かな夜、蛍も飛ぶ中、月を見たらきれいと思う。『夏は夜』というところで、私も、昼に見えないものがたくさん見えて夏は夜が一番とを感じる。」と記述している。これらの記述から、自分と違うところがあることや夏の感じ方に共感できることについて自分なりにまとめていることがわかる。

本実践から、文章中の知っている言葉を手がかりに自分の考えたことを伝え合うことは、筆者のものの見

方・感じ方・考え方に触れ、自分のものの見方・感じ方・考え方と比べながら読むことにつながったと考えられる。
(羽島 彩加)

3. 中学校における授業実践

「枕草子」(学校図書3年)

1 研究テーマとの関連 —— 本実践の仮説 ——

中学校における伝統的な言語文化の学習のねらいは、小学校での学習を基礎として一層古典に親しむことにある。古典特有のリズムを味わうとともに、古典に表れたものの見方・感じ方・考え方に触れて自分なりの感想や意見を持たせたい。古典を遠い世界のものとして見るのではなく、現在生きている自分たちと関係があり意味のあるものだという事に気づかせたい。このような古典の現代的価値は、昔の人と今の人のものの見方・感じ方・考え方を比較し、自分の考えを持つことで感じることはできるのではないかと、次のような仮説を設定した。

昔の人と今の人のものの見方・感じ方・考え方を比較し、自ら考えることによって、古典の価値や古典を読む意義を感得することができるだろう。
--

2 教材の分析および授業の計画

『枕草子』の第1段「春はあけぼの」を教材とする。これは中学校の全ての教科書に取り上げられている。

この段には、筆者清少納言の四季に対する独自の見方や感じ方が表されている。当時は『古今和歌集』に表現されている季節感が時代の規範となっていた。筆者は「月」「虫の音」「雪」などの題材に見られる既成の美意識を踏まえながら、新たに発見した美として春のあけぼのの変化する空の様子、夏の夜の闇・蛍・雨、秋の夕暮れのからす、雪や霜のない冬の朝の寒さなどを挙げています。伝統や規範を超えた、新たな美を提示しているのである。

そこで、授業では『古今和歌集』と比べて清少納言の感覚の独自性をとらえるとともに、その四季に対する感覚を自分たちの見方や感じ方と比べ、四季についての考えを持たせたい。このような学習を通して、自然や四季についての認識を深めて古典の現代的価値を発見することができるか、検証したい。古典を自分たちと関わりのあるものだと感じさせることができれば、我が国の言語文化に対する関心を深め、それを継承・発展させる態度を育てることにもなるだろう。

3 授業の実際

(1) 学習目標

- ①繰り返し音読することを通して古典のリズムを味わう。
- ②簡潔な文章や表現上の工夫などの描き方とその効

果をとらえる。

③清少納言の四季に対するものの見方を、現代のそれと比べてとらえる。

④『古今和歌集』との比較から、清少納言の独自の美意識をとらえる。

⑤四季について考え、意見を持つ。

(2) 学習計画 (全6時間)

第1時 『枕草子』の概要を知る。自分たちの四季感を出し合う。

第2時 全体の構成をとらえると同時に、「春」「夏」の部を読む。

第3時 「秋」「冬」の部を読む。

第4時 清少納言の四季感の独自性をとらえるとともに、自分たちの四季感との共通点と相違点を明らかにする。

第5時 「自分たちと四季」という題で意見を書く。

第6時 自分たちが書いた意見を読み合い、感想や意見を交流する。

(3) 授業の展開

第1時は、「四季それぞれの季節感が感じられるのはどんな時か」という課題について、まず個人が二つの季節を担当して書き、次にそれを4人程度のグループで分類した。分類の項目として「気候」「行事」「生活」「植物」「動物」「食べ物」「音」などを立てていた。第2・第3時は、清少納言の四季に対する感覚を自分たちの四季感と比べながら把握した。また、文章の内容と合わせて省略や対比などの描き方の効果をとらえた。第4時では、まず『古今和歌集』四季部の景物(松田武夫『古今集の構造に関する研究』〔風間書房〕による)で「春はあけぼの」の中に出てくるものを確認し、清少納言の四季感の独自性をとらえた。次に自分たちの四季感と清少納言のものとを比べて、その共通点と相違点を書き、それを発表した。第5時では、「自分たちと四季」という題で600字程度の文章を書き、第6時では、第4時に書いた清少納言と自分たちの四季感の共通点と相違点をまとめたもの、および第5時で書いた意見を整理したものを読み合い、感想や意見を交流した。

(4) 清少納言と自分たちの四季感の共通点と相違点

共通点

- ・自然を美しいと感じている。
- ・視覚、聴覚、触覚で感じているものを挙げている。
- ・清少納言が一般常識として書いているものは自分達も四季感としてとらえている。(雪・虫の音・蛍)
- ・『古今和歌集』の時代にはなかった四季感、新しい四季感をもっている。

相違点

- ・昔(清少納言)は自然や身のまわりの生活から季節感を感じているが、今は行事・イベント・食べ物などから季節感を感じている。
- ・昔は自分が体験したことに季節感を感じているが今は言葉からのイメージやメディアからの情報によって四季を感じている。
- ・昔の人は感覚が鋭く、また動きなど細かいところまで見ているが、今は五感から遠ざかり、目の端に映った自然しか見ていない。
- ・昔はゆっくりと季節を感じる時間があるが、今は時間に追われて自然をゆっくり見ていない。
- ・昔は自然と触れ合う機会が多いが、今は冷暖房設備が整い、また室内での娯楽も増えて外に出ようとしない。街には建物や看板が多く、電気の普及で闇も感じられない。

(5) 第5時に書いた生徒の意見

- ・テレビ、インターネットなどが人々の感性を共通化し、画一化している。
- ・もっと自然に目を向けて五感を使って自然と関わることが必要だ。
- ・季節はそれぞれの美しさを見せてくれているが、私たちはそれを見落としている。
- ・季節や四季についてあまり関心がなかったが、四季の大切さに気がついた。
- ・四季があることによって明るい気持ちになったり寂しさを感じたりでき、心情も生活も豊かになる。
- ・四季を感じるのは日本の文化であり、日本人の感性の根っこの部分は変わらない。
- ・過去と現在、1000年経っても根本的なところは“日本人”のままである。
- ・現代人には現代人なりの新しい感じ方がある。行事などから季節を感じて楽しむのもよい。
- ・いつの時代にも特有の四季感があると思うので、現代の四季感を否定しないで大事にすればよい。
- ・こういう時代だからこそ、日本文化にふれて四季のよさを感じるべきである。

4 考察

第1時において自分たちの四季感を出し合ったことは、『枕草子』を読むための動機づけになった。一千年前の清少納言は四季についてどのような見方や感じ方をしているのか、自分たちの四季感と同じなのか違うのか、といった関心を持って読むことができた。また、自分たちの見方や感じ方と比べることで清少納言の感覚や感性を確かにとらえることができたという点でも、有効であった。

生徒たちは自分たちの四季感と比べながら清少納言

の感覚や感性の特性をとらえているが、その一方で、清少納言のものの見方や感じ方の視点から自分たちの四季に対する見方や感じ方を対象化してその性格をとらえてもいる。「今は行事・イベント・食べ物などから季節感を感じている」「今は五感から遠ざかり、目の端に映った自然しか見ていない」という見方がそれである。さらに、現代人の自然や四季に対する感じ方の背景の状況にも目を向けている。「街には建物や看板が多く、電気の普及で闇も感じられない」「冷暖房設備が整い、また室内での娯楽も増えて外に出ようとしない」「今は時間に追われて自然をゆっくり見えない」「メディアからの情報によって四季を感じている」「テレビ、インターネットなどが人々の感性を共通化し、画一化している」などと、現代の都市化や情報化の中での生活の仕方や自然との関わり方の特徴をしっかりと把握している。自然と直に接し、五感を働かせて自然の微妙な変化や動きをとらえている昔と大きく異なっていると述べているのである。

しかし、その一方、昔と変わらない日本の民俗の心性に触れている意見もある。「自然を美しいと感じている」「四季を感じるのは日本の文化であり、日本人の根っこの部分は変わらない」「過去と現在、1000年経っても根本的なところは“日本人”のままである」などである。

このように古典作品を読んで現代を見つめ、昔と変わった面と変わらない面を発見しているのである。

また、清少納言の感覚との共通点として『古今和歌集』の時代にはなかった四季感、新しい四季感をもっている」という意見にも注目したい。現代人の四季感は『古今和歌集』の時代、そして今まで述べてきたようにその100年後の清少納言の四季感とも違っているところが多いのである。古い時代に和歌の世界で形成された季節感が現代にまで引き継がれ連続と続いている反面、現代人は全く新しい季節感を持ってもいるのである。第6時において、自分たちが書いた意見を読み合っただけで感想や意見を交流した時に、みんなの共感を得ていたのが「いつの時代にも特有の四季感があると思うので、現代の四季感を否定しないで大事にすればよい」「現代人には現代人なりの新しい感じ方がある。行事などから季節を感じて楽しむのもよい」という意見であった。また、「自然にしる行事にしる、自分なりの四季感を持てば一年が過ぎてゆくのが楽しくなる」という意見も出された。

第5時に書いた意見には「四季の大切さに気がついた」「四季があることによって明るい気持ちになったり寂しさを感じたりでき、心情も生活も豊かになる」などと、四季の価値や重要性を述べているものもあり、

また、「こういう時代だからこそ、日本文化にふれて四季のよさを感じるべきである」という、古典の現代的価値を直接述べているものもあった。

生徒たちは、清少納言と自分たちのものの見方や感じ方を比較し、意見を書いたりその意見を読み合ったりして自然や四季についての認識を深めていると思われる。古典のよさや面白さを感じ、古典を読むことの現代的価値を感じていると考えることができる。

4. 小・中・高における伝統的な言語文化の学習の連関について ——「春はあけぼの」の場合——

小学校では、古典の中の知っている言葉を手がかりに作品世界に入り、夏から連想する言葉を挙げたり、「あなたは、夏のことを表現するのに夜を選びますか」という問いに答えたりすることで自分たちの夏の感じ方を出し、それと比べながら清少納言の夏の感じ方をとらえている。自分の考えたことを伝え合ったり文章に書いたりする活動を通して筆者のものの見方・感じ方・考え方に触れている。受け身となって教えられるのではなく、主体的に考えて古典の世界に触れ、文章の内容の大体をとらえている。

中学校では、清少納言の四季感を深く理解するとともに、筆者と自分たちのものの見方・感じ方・考え方の比較を通して、自然や四季について自分の考えを持ち、それを交流しあって認識を深めている。『古今和歌集』の景物と比べることで、清少納言のものの見方や感じ方の特質を歴史の中に置いて把握し、また作品の描き方にも注目して作品世界をとらえているのも中学校の学習の特徴である。さらに、自分たちのものの見方・感じ方・考え方の背景の状況についても考えている。都市化や情報化という現代の環境や状況と関わらせて、現代人の自然や四季に対する見方や感じ方をとらえているのである。

小・中二つの実践を通して、伝統的な言語文化（ここでは「春はあけぼの」）の学習の連関について次のようなことを考えた。

小学校では、自分たちのものの見方・感じ方・考え方を出し合いながら筆者のものの見方・感じ方・考え方に触れ、古典の世界を読み味わって楽しむ。中学校では、表現や内容をとらえて作品世界を深く理解し、さらに今の人のものの見方・感じ方・考え方との比較を通して、その作品が取り上げている問題（人間や社会や自然など）についての認識を広げたり深めたりしていく。

そして、どちらの学習においても、自分たちが学習の主体となって活動し、何かに気づいたり何かを発見したりすることが大切である。

中学校の学習においては、最初に自分たちの四季感を出し合い、それを活用しつつ授業を展開していったが、文章を読んだ後で四季それぞれの最もその季節らしいものを時間帯とともに書かせ、それを読み合うことで今の人のものの見方や感じ方を比べるという方法も考えられる。その場合は、生徒たち自身が清少納言と同じく美の発見者・表現者となる。創造的な学習で行ってみたい方法であるので、「春はあけぼの」の学習指導についてさらに考えていきたい。

高校では、中学校の学習の発展として、『徒然草』「をりふしの移り変はるこそ」(第19段)や『新古今和歌集』や近世の俳諧などと比較し、自然や四季についてさらに深く考える授業の実践が考えられよう。今後の課題としたい。(新治 功)

5. おわりに

以上のように、『枕草子』「春はあけぼの」について小学校5年生と中学校3年生での学習の展開を提示し、その考察を行ってきた。両学年とも、児童・生徒の読む力の発達のみちすじにおいて、重要な意味を帯びる学年であり、この両学年でほぼ同じ素材を用いて授業を展開し、その結果を考察することは、学校における「伝統的な言語文化」の学習の連関を考えるための、重要な柱をもたらすことになるだろう。

小学校・中学校のそれぞれの実践において、比較という方法が用いられた。いずれの授業実践においても、学習者にとっての既知と未知との接点を確かめていく企てとして、比較という方法が機能していたと言ってよい。この場合、学習者にとって未知にあたるのが「春はあけぼの」の文章内容であり、既知にあたるのが学習者の日常生活とそこで暮らす自らの思考や感覚であったと言ってよいだろう。

たとえば、授業の振り返りとして、小学校5年生が書いた文に「筆者は、夜、素朴な夏の夜に楽しみを感じているけど、自分たちは、人工的なもので夏を過ごしている。」というものや、「筆者は、夏の夜しか見られない、感じられない『自然』を素朴に静かに楽しんでいるのに対して、自分は夏の昼でも朝でも見られて感じられる人工の物を楽しんでいると思った。昔は、自然(虫など)に触れることが現代よりも多いのかもしれないと感じた。」というものが見られたが、これらの文でも「筆者」と「自分」「自分たち」が対比されており、未知の領分としての「春はあけぼの」の内容と、既知の領分としての自分の経験とが対置されている。

小学校5年生においてはまず、このように、比較という方法を用いて、「春はあけぼの」の内容と自分た

ちの経験やものの見方・感じ方・考え方との対置がなされ、未知であったはずの「春はあけぼの」の世界との出会いがもたらされる一方で、自分たちの経験を引き出し、見つめ直すことが営まれている。

この、比較という方法は、中学校3年生の授業実践においても有効に活用された。しかし、そのもたらす効果は、本稿5でも述べられているように、小学校5年生のそれとは違っていた。

「春はあけぼの」の筆者と自分たちとの相違点の指摘に関して、その大筋のところは小学校5年生と中学校3年生でそれほどの違いはない。しかし、個々の記述内容を比べてみると、「昔は自分が体験したことに季節感を感じているが今は言葉からのイメージやメディアからの情報によって季節感を感じている。」「昔の人は感覚が鋭く、また動きなど細かいところまで見ているが、今は五感から遠ざかり、目の端に映った自然しか見ていない。」というふうに、より具体的で、かつ見方や感じ方の内実にまで踏み込むようなかたちで比較を行っているところに中学校3年生の比較の仕方の大きな特徴がある。興味深いのは、中学校3年生が第5時に書いた「自分たちと四季」のなかで、昔と今の相違点に言及するものだけでなく、共通点を指摘するものが見られたということである。「日本人」という言葉を用いてまとめられているが、これはむしろ歴史のなかで作られてきた文化的特徴に言及したものと捉えてみる必要があることがらのように思われる。他の文化・領域で同様のことがあるのか、ないのか、他の国・地域での検討可能な事例を取り上げて考えてみる、といった学習に広げていくこともできるだろう。

もちろん、比較を通して相違点と共通点を指摘するだけですべてが終わるわけではない。そうした営みはあくまでもより深く・広い探究への出発点である。そのように考えるなら、中学校3年生が「自分たちと四季」のなかに記したことは、やがて高等学校での国語学習で、「伝統的な言語文化」としての古典の再発見(言語文化のどのような要素が「古典」として残されてきたのか、失われてきたものは何か)を行っていくことに、つないでいくことができるのではないだろうか。

小学校5年生は、文章内の「論理構造」を捉えながら自らの生活世界の問題のいくつかに焦点化しながら読みを進めているし、中学校3年生は「春はあけぼの」に自分たちが行った読みをメタ認知的に対象化しながら自分たちの季節感を意味づけていた。高校生になるとそれが広げ、深められると考えられる。どのように深められるのかの探究は、今後の課題としたい。

(山元 隆春)